

Post-NICU 入室児の退院背景と退院準備, 退院後に必要性を覚えた社会資源と学習課題の解明

新潟医療福祉大学健康科学部看護学科・
高橋智美, 塚本康子

【背景】

慢性的なNICU (Neonatal Intensive Care Unit: 新生児特定集中治療室. 以下NICU と称す) 病床の不足から, 国立病院機構はPost-NICU 病床等の整備を推進した. また2009年に障がい児(者)が地域で安心して暮らせる社会の実現を目指して, 障がい者制度改革が行われたが, その後3年間は新規にPost-NICU 病床等へ入院した患者の在宅への移行や転院は皆無であった. しかし, 昨年度にSEIQoL-DWを用いて実施した家族の生活の質の調査では, 患児に関するCueの満足度と退院には関係があることが示唆され¹⁾, 本事例の保護者は近々の退院を目指して医療, 生活, 教育等の面で退院準備をしており, 実際にその後, 退院をした.

そこで, 本研究では, Post-NICU から退院をした本事例の保護者が, 退院を決めたその背景と退院のための準備, 退院後に必要性を覚えた社会資源と学習課題を解明する.

【方法】

1) 研究方法: 記述的デザイン 調査研究

分析には, 面接で得られたテキストデータ(研究参加者の経験と生活世界の説明)を理解し, そのデータからシンボル図を作成するため, 質的統合法(KJ法)を用いる. 質的統合法(KJ法)は, 看護実践の現象にある多くの変数を捨象することなく, その全体像を構造的に表すことが可能であり, 看護の現象を克明な記述から看護の現象を構造的に把握することに優れている²⁾.

(1) 調査方法; 半構成面接

(2) 分析方法; 質的統合法(KJ法)

(3) 調査期間; 2012年7月31日

2) 研究対象: Post-NICU から退院をした児の保護者1名

【結果】

表1 研究対象者の背景

事例	年代	性別	本人以外の家族構成	職業	サポート
A	40台	女	夫, 患児	なし	実父母

表2 研究対象者の入院をしている児の概要

事例	研究対象者の入院をしている児の概要				
	年齢	性別	病名	前病床	Post-N入室後の外泊経験
A	8	男	全前脳症	一般床	退院前に1回

退院決定の背景には, 【以前の在宅体験: 以前を思えばこんな, これぐらいならやれるなっていう楽観】, 【タイミングと本人の体調が一致: 時間, 感情の安定, 手厚く見てもらえる環境の整備】, 【前向き感情への刺激: 障害児の在宅療養を実践している母親たちのがんばりや周囲の支援】がシンボル化され, 退院決定に影響していた. また, 【学校の選択: 分校入学と訪問コース選択による病院から自宅へのスムーズな移行】, 【密に連絡が取り合える病院のバックアップ: かかりつ

け病院による訪問診療, 訪問看護, 訪問リハ等の必要性】が抽出されこれらは双方向に影響し合っていた. 更に退院を阻害する背景として【本音: 「お宅のお子さんは重病ですよ. ここにずっといたほうがいいですよ.」と言ってくれたら, それもありかなとのちょっとずるい思い】もシンボル化された. 退院準備では, 【在宅療養物品準備: 多くの専門職種の事前介入と病院からの機器レンタル等の支援】, 【住宅改修と経済: 特児の貯金, 小慢の助成や補助, 親や妹からの支援】がシンボル化された.

退院後に必要性を覚えた社会資源では, 【家族の協力と感謝の気持ち: 親や夫の協力の必要性和協力への感謝】, 【選択できる社会資源の拡大: 訪問以外に個人が自由に選択できる社会資源】がシンボル化された. 退院後の学習課題では, 【心配事と習得したい知識・技術: 移動が心配, 抱っこ自分が丈夫になる方法, 誰でも簡単にハ実施方法の取得希望】がシンボル化された. また退院後の思いとして【生活への思い: 周囲に甘えない普通の暮らしを希望】がシンボル化された.

【考察】

退院決定の背景には, 保護者の前向き感情が影響していた. 本事例は, 昨年度の調査でCueとして上げられた「患児」のレベルが93と高かった. そしてこのレベルが高いことはそのCueの状態がよりよい状態であることを示している³⁾. そのため児に対する満足度の高さが前向き感情に繋がり, 以前の在宅体験を評価でき, これが本音を上回ったと推察する. また, 退院決定の背景ばかりでなく, 退院後に必要性を覚えた社会資源や学習課題では, 多職種が連携をして支援することの重要性が明らかになった. 多職種というと, 異なった分野, 領域, 職種に属する複数の専門職を考えたが, 非専門的な援助者を含む⁴⁾ことを念頭に, 専門職, 非専門職を問わず, 家族を筆頭とした多くの人々と連携を深めて支援していく必要がある.

【結論】

post-NICU から退院をした本事例の保護者が, 退院を決めたその背景には【以前の在宅体験】, 【前向き感情】, 【学校の選択】, 【病院のバックアップ】があり, 退院のための準備には【在宅療養物品準備】, 【住宅改修】, 退院後に必要性を覚えた社会資源には【家族の協力】, 【選択できる社会資源の拡大】, 学習課題には【移動, 抱っこ自分が丈夫になる方法, 誰でも簡単にハ実施方法の取得】であることが明らかになった.

【文献】

- 1) 高橋智美, 塚本康子. Post-NICU 病床入室児保護者の生活の質～退院支援モデル構築前 SEIQoL-DW pre-test からの一考察～. 新潟医療福祉学会誌. 2012; 12(1): 50.
- 2) 正木治恵. 科学的な質的研究のための質的統合法(KJ法)と考察法. 看護研究. 2008; 41(1): 8.
- 3) 1) 同掲
- 4) 山中京子. 医療・保険・福祉領域における「連携」の概念の検討と再構成, 社会問題研究, 2003; 53(1): 5.